
マジで恋したその後は。

あずまひとみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジで恋したその後は。

【Nコード】

N9125S

【作者名】

あずまひとみ

【あらすじ】

晴れて本人同士公認、親公認の幼なじみカップルになった二人だったが問題はやっぱりあるわけで。

『で、どうすんの琉依』

冷血漢×昭和女の幼なじみラブの、続編的短期連載です。

01:キスまでだってばっ(前書き)

マジで恋する5秒前シリーズ、続編的短期連載です^^

今回かなり(いや最初からそうでしたけども)王道いきます。苦
手な方は回れ右!

漫画とか小説とかかなり読む方は冒頭でその後の展開がピンとく
るくらいの王道です(笑)

ええ、この展開大好物ですがなにか()

独立しても読めますが、できれば1作目から読むことをオススメ
致します

01:キスマでだってばっ

付き合って7ヶ月目の月の、冬休みのある日。あたしは中学校時代の友達　　今も交流はがつり続けている　　由香と、昼間から遊んでいた。

「ちょっと待って琉依、もう一回、もう一回」

「いや、だぁーかぁーらぁー」

さっきの言葉をもう一回繰り返せとせがむ由香に、頭を低くしてこっそり喋る。今あたしたちは某ファミレスでドリンクバーをするわけだけど　　他の客も皆自分達の話に夢中だな、よしっ。

「キスマでだってばっ」　　精一杯恥ずかしさを隠して言った。言っつてやった。由香が目をまんまるくする。∴何よその反応。

「うわー聞き間違いじゃなかったんだ∴」

「そーよ。悪い？すみませんねご期待に添えなくてっ」

ぶうっとな頬を膨らます。

何の話かというと言わずもがな　　あいつ、飛鳥とのことだ。

飛鳥、とはあたしの彼氏で、記憶がないレベルで小さい頃からの幼なじみだ。今現在ここにはいない奴のことを思い浮かべると、ついでに今朝の会話と自分がしでかしたことまで再生されて思わずあたしは下を向いた。∴一体どうすればいいんだろう。

「ちょっと、いきなり下向いてどした。なに、なんかしたの？」

「いや∴うーん、なんかっつていうか∴まあなんかあったんだけど！」

「∴琉依、相変わらず日本語ヘン」

「にっ、日本語おかしくてしかも古いのも分かってるからいちいち突っ込まないでよっ」

ただでさえ普段から飛鳥に色々言われてるのにここでも言われたらたまったもんじゃないと、あたしは右手を前に出して由香の言葉を止めた。あんた動作まで昭和っぽいわよね、という由香の言葉は聞かなかったことにする。

まあ話は戻ってあたしが今朝なにをしたかってゆーと。

ぶん殴ってきたのだ、飛鳥を。

これは『しでかした』方で、そのことを由香に告げると奴は天井を仰いで笑いやがった。

「ちょ、殴ったって…あははは、なんでっ?」

「わ、笑うなあ!殴ったって言ってもね!こっ…そんな強くはやってないよ!？」

「逆に全力だったらびっくりだよ、そんなの。で、なんで殴るなんて事態になったのさ?」

うううう由香め…… やっぱりそこ聞くか〜!

あたしが飛鳥を殴った理由は殴る直前までの飛鳥とのやりとりであり、それをさらっと言えないのには、さらにワケがあるのだ。

「あ、あのさあ…さっき、キスマでだって言っただじゃん」

「ああうん、7ヶ月も付き合っただってキスマまでな可哀相な飛鳥くんの話だったよね」

うぐっ!と言葉に詰まった。

…そう、原因はこれに直結している。

「やつ…ぱり、それって飛鳥に悪いことなのかな。キス以上のこともしなきゃいけない?」 おずおずと由香を窺つと、由香はきょとんとして聞いた。

「べつに『しなきゃいけない』ってことでもないけど…、なに?そっち関係なの」

由香の言葉にまた目を伏せる。そしてから、あたしは今朝あったことを話始めた。

昨日の夜、あたしは飛鳥の部屋に遊びに行っていた。最初はゲームをしてただけで、そのうち眠くなっていたのか寝ていたらしい。目が覚めると朝になっていて、飛鳥のベッドの中だった。

「ん〜朝？あたしコレ寝ちゃったか……。飛鳥あ〜？」
起き上がって姿が見えない飛鳥の名前を呼ぶと、それに反応したようにその間を空けずに部屋の扉が開いた。

頭ボサボサでいかにも今起きましたというあたしに対して、現れた飛鳥は部屋着ではあるものの身なりはきちんとしていた。

知ってはいたけれど我が恋人ながら美しい。無意識に見惚れているといきなりため息をつかれて、しかも後頭部をぐわしと掴まれて引き寄せられた。

「!？」
ベッドサイドに立ったままの飛鳥はそのまま何も言わずに体を折り曲げる。近づく綺麗な顔に心拍数は上がり続け　あ、焦点越えたと思ったら荒々しく口づけられていた。

「んん!?!...んうっっ!!」
いきなりなんなんだー!!嫌じゃないけどむしる飛鳥とするキスは好きだけど苦しい〜ッ!!

そんなことも途中からは考えられなくなった。角度を変えて、深さを変えて終わらないキスに、唇も、頭も、全身さえもが痺れる。

飛鳥が一瞬唇を離れた。その瞬間自分のものとは思えない声が漏れる。だけど、自分のこの声に慣らされるくらいにはもうキスは重ねている。

いつの間にか同じ様にベッドに上がって座っていた飛鳥の首に腕を回してしがみつく。それでもしないと自分の姿勢を支えてもらえない。はあ、と飛鳥の首筋のため息をつく、

「う、あっ!?!」

認知できないほどの速さでベッドに転がされていた。

「あ、飛鳥っ？」

「…何」

やっと聞けた大好きな声。だけど

「なに、なんか怒ってるっ!？」

真上にいる飛鳥に問いかける。なんか声が怖いよう!

「…べつに」

「嘘だ嘘だ!アンタ、なんかある時に限ってべつにって言うじゃん!分かってんだからねっ」

「……………琉依」

「なによっ」

「限界」

唐突な飛鳥の言葉に一瞬呆然とした。：限界?何が?そんなこと聞き返すほどあたしは無知なわけじゃない 勉強に使える頭はないけど。今この状況でそんなこと言われたら当てはまることなんて一つしか…。

「えーとそれは…恋人同士がベッドで行うあれですか」

飛鳥を窺うと何当たり前なことほざいてんだと目で言われた(気がした)。ちょっと待って。べつに嫌なわけじゃない。嫌なわけじゃないけれど。

「えと…飛鳥サン、いま朝デスよ」

「だから」

「そーいうことって普通朝はしないもんなんじゃ…」

「決まってるわけじゃない」

ええまあ、そりゃそうでしょうとも!だけどあたしは気持ちの準備が!

あわあわしていると上にいるままの飛鳥の右手が、あたしの頬を優しく撫でた。普段のぶっきらぼうな飛鳥からは想像もつかないような壊れ物を扱うような触れ方で、思わずびくつと体が反応を示す。

「…琉依」

あたしを呼ぶ声が甘くて。頬に添えられた飛鳥の手を自分の左手で包み込むように被せた。その行動が飛鳥のスイッチを入れることになるなんて微塵も思わずに。

「……………」

飛鳥の動きが一瞬止まったかと思うと、次の瞬間には噛み付くよ
うな いや、なんだこれもう食べられてるって言ったほうが近
いんじゃない、というキスをされた。

「う……………、あつ…す、」

名前。呼びたいのに呼べない。飛鳥本人の舌があたしの舌の動きを邪魔する。そうしながら服の中に手が入ってきたのが分かった。その手があまりにも自然に下着のホックを外す。でも抵抗できないだつてそもそもあたしは飛鳥とこーゆうことするのが嫌なわけじゃない。

じゃあ何つて ああそう、ただあたしは未知のモノが怖いんだ。

「やだつ……………！」

それが分かった瞬間あたしは飛鳥を思い切り殴り飛ばしていた。といつても溶かされた思考とまともに力が出ない腕では飛鳥があたしから離れたくらいで終わる威力だつただけだ。

いきなり殴られて横を向いた無表情な飛鳥の横顔が、傷ついたように一瞬歪んだ気がして。

…嘘、そんな あたしは飛鳥を傷つけたかつたわけじゃないのに。

それでもこつちからは何も言えなくて、着ている服の裾をぎゅつと握り締めて唇を噛んだ。

…………… 目の前の飛鳥が、目を固く閉じてゆっくり息を吐く。

そうしてそのあと目を開けると、あたしに手を伸ばしてきた。

触れられたことを記憶している体が意志に反してビクツと揺れる。

ああバカあたしこれじゃまた、

…案の定飛鳥の瞳が一瞬揺れた。

だけど手は止まらず、その指はあたしの目尻を優しく拭った。

「……………え、」

予想外の行動に素の呟きが漏れる。

「泣かしてゴメン」

飛鳥はそれだけ言うつとベッドから降りて、部屋を出ていった。

泣かして…？

その背を何も言えずに見送って、何秒かの間止まっていたあたしは我に返って自分の目尻に触れてみた。

…ほんとだ、泣いてる。いつのまに？全然気が付かなかった。

でも、自分のことだからわかる。これは泣くほど嫌だったとか、飛鳥に怯えてとかじゃない。…………たぶんもうキスの段階で出てた生理的涙だ。だけど飛鳥は自分のせいだと思ったんだ。あたしがそれくらいのことを彼にした。

「飛鳥のこと、傷つけた」

そのことで今度こそ涙が流れた。

傷ついたような飛鳥の横顔が忘れられない。あたしはこれからどうすればいいんだろう。

「…ってなことがあったんだけど…」

阿呆かアンタはその純情どっかに捨ててこいっ！ と

かそついうことを間髪入れずに切り返されると思っていたあたしは身構えて向かいに座る由香に目をやった。

ただどいくら待ってもそんな口撃は襲ってこず。

「……………ゆーか？」

「……………」

「うおーい、ゆ・う・か・さーん」

「うるさい聞こえてるからちよっと黙れ」

……ひどい。反応ないから心配したのに。

「…あのさ琉依、ちょっと一つ確認したいんだけど」

しかもあたしがシユンとしたのなんて関係なしに質問？まあ、答えるけど。

「あのさあ…アンタ」

由香が言いにくそうに上目遣いになる。

「うん？」

「いや、うん確実にそうだとは思うんだけどね…？」

だってそんな飛鳥君が許すわけないし、いやいやありえないとか1人でぶつぶつ呟く由香。

なに、なんなのさ。

「アンタ…」

「うん、だから何」

「飛鳥君が初めての相手ってことでいいんだよね？」

飲みかけていたコーラをブツと吐いた。

「あああああ、あたりまえじゃん！何バカなことっ」

「あ、だよね良かったー」

安心した、って笑うけど何が？

「いや、だってアンタ飛鳥くんの前に実は誰かと何かあつたら飛鳥くんその人のこと殺しに生きそう」

「こ………ッ！んなわけないじゃん、てか何でそんなこと聴くのよんなことアンタもその…飛鳥も、分かり切ってることでしょ！？」

「うん、そうなんだけどねー」

言いながら由香は氷が溶けて薄まった烏龍茶をストローでかき回す。

「なんていうかさ、今の話聴いてたらあまりにも琉依が飛鳥くんを誘惑してるから」

「ゆ…っ…！」

今度こそあたしは言葉を失った。

し…してない！断じてしてない！！誘惑の仕方なんてあたし知ら

よつとスイッチだったのかわくわくは思ったけどまさかあんなことになるなんて思ってもみなかったし！うわなんかマジで恥ずかしい！
「…なんで？べつにいいじゃん。それで試練与えられるのは飛鳥くんだけど結局は喜ぶんだろうし」

「それは…そうなのかもしれないけど。でも…って、あたし今声に出して喋ったつもりないんだけど！？」

「声出したのと同じくらいレベルで顔に出てるからアンタは。まあ…、だから飛鳥くんもやめてくれたんじゃないの」

「噛み付こうと思ってたのにいきなり話が戻って口をつぐんだ。」

「…そう、きつとそうなんだよね。結局あたしは飛鳥に大事にされていて。じゃなきゃ7ヶ月なんもないなんてありえないし、だから涙ちよつと出ただけであいつは止めてくれたんだ。…そんなことくらい、分かっている。」

「だから余計あんな反応しかできなかった自分に落ち込む。本当に嫌なわけじゃなかったのに。」

「で、どうすんの琉依」

「……………」

「どうしたいのよ、飛鳥くんどうなりたいの」

「矢継ぎ早に答えを求められて考える。」

「……………嫌なんじゃ、なかったんだって。ただちよつと慣れてないから怖かっただけなのって。それで何より、あたしは飛鳥と一緒にいる時間が大好きなんだよ、あの時はとっさにあんな反応しかできなくてごめんねって。…そう、伝えたい。」

「じゃあ、伝えに行きなよ」

由香がフツと息をつきながら微笑む。その表情は大人っぽくて、これを独り占めできる由香の彼氏は幸せもんだなあなんて思った。

「…うん、ありがと。そうする。じゃあ行ってくる！！」

「は！？今！？」

「今！」

目を見開いて驚く由香にあたしは答える。

「だって早く仲直りしたいもん、それで飛鳥にくつつきたい!!」
ドリンクバーしか頼んでいない伝票を手に立ち上がって宣言する
と、

「うわぁ…」

「はいソコうわぁ言わない! キャラじゃないの分かってるから!」

「いや、じゃなくて…」

「じゃあなによ」

「天然爆弾、落ちてるなあって」

「!?!?!」

なんのことを言ってるのかピンと来て顔が熱くなった。

だ、だってだってだって! そう思っちゃったんだもん、仕方ない
じゃんつ。

「これからそれでまた飛鳥くんのこと悩殺しにいくのね…ガンバ
ッ」

きゆるん、と。

語尾に星がつきそうな満面の笑顔で由香は言った。 中学の頃か
らあたしがこうやってからかわれるのは決まったパターンだ、逃げ
るに限る。

「し、知らない! もう行く、バイバイッ」

でもさ由香。

助けられたのは事実だから。

「今日、本当にありがとう。じゃねっ」

せめてドリンクバー奢るくらいはしなくちゃね。

手を振って会計に向かった。 どういたしまして、と聞こえた小さ
い声に自然と笑顔になって。 だけど最後に一言言わなきゃいけな
かったことを思いだしたあたしはお金を払った後一旦席まで戻った。

「ね、ね、由香」

「わっ、琉依まだいたの。何?」

振り返る愛しき親友に一言!

「『接吻』とかって。 今日是由香の方がよっぽど昭和だったね!」

「！！！」

何かを言われる前にあたしは素早く店を出た。一拍遅れて背後で琉依く！という金切り声が聞こえたけど、もうルンルン気分のおたしは気にも留めなかった。

だってこん時は疑いもしてなかったんだ。

今日、家帰ったらすぐに飛鳥と仲直りしてまた一緒にいられるんだってこと。

01:キヌまでだってばっ (後書き)

読了ありがとうございます^^

感想・評価頂けると更新スピードが上がること请け合い

5秒前シリーズは好評だったので連載に朝鮮してみましたが、さてどうなることでしょう。頑張りますので応援よろしくお願いします
(、、)
(、、)

02:このスカポントン!

「こーんにちはっ。飛鳥ママ、飛鳥はいる?」

由香と会ったそのままの勢いで飛鳥んちに飛び込んだあたしは、そこに飛鳥がいて会えることを毛ほども疑わず声をかけた。

専業主婦の飛鳥ママは予想通り家にいて、玄関まで出てくるというものようにおっとりとした話しだす。

「あら、琉依ちゃん。あら...? 琉依ちゃん飛鳥と夜通し部屋にいて、ゲームしてたんじゃないの?」

うっ! 相変わらずおっとりしてるけどブレないなあこの人っ。

「あ、あははは...。実は朝のうちにブランド伝いに帰っててえ」
「あらあそうなの? 一声かけてくれればよかったのに...」

あなたの息子に襲われそうになったので殴って喧嘩別れみたいになりました、なんて言えるかあ!

「ごめんなさい、今日由香と約束あったから急いで」

「由香ちゃん...て、あれよね、中学の時の同級生の...」

「あ、はいそうですそうです!」

「懐かしいわ。今でも仲いいの?」

「...うん、他にも友達はたくさんいるけど由香はちょっと違う感じかな」

なんてったって中学3年間飛鳥の気持ち知ってて見守ってくれてたみたいだし。それに、今飛鳥と付き合ってるのだからあの時の由香の行動がなければありえなかったんじゃないだろうか。だって飛鳥絶対、自分からはよほどのことないと言わなそう。...あたしはバカみたいに無自覚だったし。

「いいお友達もってよかったわねえ。うちの子とも早く仲直りしてあげてね」

「へ」

間抜けな声が出た。飛鳥ママ、なぜそれを!? あたしまた声なみ

に顔に出てた!?

「うん、琉依ちゃんじゃなくて…飛鳥がね。なんか、出てくとき機嫌わるい風だったから」

「おお…どうやら今は顔に出てたらしい。てか、機嫌わるい風って、マジで？」

「機嫌…悪かったんですか飛鳥サン」

「そうねえ、ま、なんとなくだけど」

「うわ…。んで、出てくときってことは飛鳥どっか行ったの？今いない？」

「うん、今はいないんじゃないかしら。私それも忘れて琉依ちゃんに部屋にいるんじゃないかなったのなんて聞いちゃって。うふふ」

「あはは…」

時々思う。飛鳥ママのおっとりさって実は作ってるんじゃないのか!?朝のすったもんだまであっさり知ってそうで怖いんですけど!

「でもね、晩ご飯までには戻って言うてたから、そのへん狙って部屋で待ち伏せしてたらいいんじゃないかしら」

琉依ちゃん得意のベランダ伝いでね。

飛鳥ママはぱちんとウインクした。うん、実情がどうでも優しいことに変わりはないからどっちでもよし。あたしが今まで見てきた優しさは嘘じゃないはずだもん。

不法侵入の許可も下りたことだし…うん?家人の許可下りたら不法侵入じゃない?合法侵入?むしろただの侵入…。

どうでもいいことをうむむと唸りながら考えていると、飛鳥ママにくすつと笑われた。

「琉依ちゃんはいつも全力投球ねえ」

「むー、あたしそれしか知らないからな。基本的に、単細胞なんだ」
「だから難しい飛鳥とちょうどいいのかもね」

飛鳥ママ…それは誉められてるのかけなされてるのか微妙なフオローだけど、でもまあ、飛鳥とあたしでセット感が漂ってるからい

いや。

「ほんじゃ、そんなくらいの時間に多分上から部屋に入ってるね。おじさんよろしく」

それだけ言うとおたしは玄関を出て、自分の家に戻った。

せつかく由香と分かれてここまで来たけど、いないんじゃないもんなあ。由香にメールを入れてみるとあの後彼氏と合流したらしいから、あたしは部屋で大人しく時間まで漫画でも読んでよつと。

そんなこんなで、テニスでエースを狙ってみたり先輩と若気の至りな恋を試してみたり蝶が舞うようなプレイスタイルのお嬢様が出てくるマンガに夢中になっていると、隣り合わせの飛鳥の部屋から物音が聞こえてきた。

視線だけで枕元の置時計を確認すると19時で…え、19時!? もうそんな時間!? 待ち伏せ作戦、もはや失敗じゃん!

…あれ。ということは、飛鳥は少なくとも昼から今まで出かけていたことになる。どこにいったんだろう。

あたしに時間を忘れさせたマンガを本棚に戻して、抜き足差し足でベランダに出た。飛鳥の部屋の窓は鍵がしめられていて、仕方ないので小さくコンコンとノックする。

そうすればいつもなら仕方ないなって感じで開けてくれるのだ
いつもなら。

だけど今日は違った。音に気づいた飛鳥は振り返ってあたしと目が合ったはずなのに、一瞬迷ったように目を細めて、その後ふいつと視線を外してしまった。

はあ?…ナニソレ。言つとくけどそんなんじゃ諦めないから。

あたしは自分ちを玄関から飛び出ると、そのまま隣んちに飛び込んだ。

「飛鳥ママごめんやつぱこっちから入らせて！」

「琉衣ちゃん。はいはいどうぞ〜」

目の前の階段を駆け上って、すぐ左の部屋の扉を開ける。

「飛鳥ア！」

借金取りさながらに部屋に押し入って、扉もしっかり閉めた。さすがにびっくりした様子を見せた飛鳥は夕ダでさえ喋らないのにまます喋らない。

「…無視、しないでよ。目、逸らされるのはさすがに悲しいよ」

直接飛鳥の顔を見ると一気に勢いがなくなった。怒りの根底にあった悲しさだけが胸に残ってて、それがまず口について出る。

「…悪い」

「目、合わせてよ。あのさ、あたし謝りたいんだ。朝のこと」

ベッドに座る飛鳥の手がびく、と動いた気がした。

「あの…まずは叩いちやってごめんね。でもね…その、昼に由香と話してて飛鳥に伝えたいことができたんだけど」

「……………」

うつ、緊張する。恥ずかしいけど、言っただあたし。

「あのさ」

「……………」

「あの、あたし」

「いい」

「……………」

「聞きたくない」

一瞬耳を疑った。聞きたくない？…なんで？

「どっぴいっことよ」

「べつに。そのままの意味」

「嘘！べつにって言った！」

「琉衣」

「な、によ」

飛鳥はベッドから立ち上がると、何も言わないままあたしに近寄った。手がのばされて、頬に触れられる。

「、、」

その瞬間、朝のことを思いだして条件反射でまたビクツと過剰反応してしまつて。

バカまたあたし！朝もこれで飛鳥のこと傷つけたのに！！

傷ついたような顔をした飛鳥の表情が眼裏に思い浮かぶ。恐る恐る、反射で瞑っていた目をゆっくり開けた。

飛鳥は、思い浮かべたような表情はしていなかった。だけど悲しそうに、笑つてた。普段は表情筋死んでんじゃないのってくらい無表情な、あの飛鳥が。

呆然とした頭で、ああやつちやつた　　そう、思った気がする。

「飛鳥……？」

「琉衣」

「…な、に」

やめて、飛鳥こそ言わないでよその先を。

「　　少し、離れるか」

ほら、だからやめてつて言ったじゃん。

「………なんで、そんなこと、言うの」

「………」

「もう、あたしのことめんどくさくなつた？いらなくなつた？」

そりゃ、そうだよ。うるさいし落ち着きないし馬鹿だし周りには言葉古いって言われるし……キス以上のことはさせないし。こんな面倒くさい彼女、あたしが男だつてきつとごめんだよ。

頭のどつかでそう思つてても、口はもう止まらない。

「今日だつてどこ行つたのか知らないけどあたしと別れたあと家いなかったみたいだし、他にあてになる女の子でも見つかった!？」

ねえ、なんか言つてよ。反論がないと、肯定されてるみたいに関

じるから。

「ただ飛鳥はこんな時まで飛鳥だった。」

「………」
「っ、もういいよ！飛鳥のバカ、無口おばけ、このスカポントン！」

それを捨て台詞にしてあたしは部屋を飛び出した。飛鳥ママ、ごめん。仲直り無理だった。それどころか余計距離開いちゃったよ。階段を駆け降りて、お邪魔しましたと叫ぶように告げて走りながら自分が泣いてるのがわかったけど、どうしようもなかった。ただ、飛鳥の目の前で泣かなかったことだけは良かったなとなんとなく思った。

ねえ飛鳥、少し離れるっていつまで？少してどれくらい？16年一緒にいてこれからも一緒にいたいって性懲りもなく思ってるのに、今さら離れるなんて拷問でしかないんだけど。

部屋に戻って枕に顔を押しつけて泣いた。声を上げるときつとすぐ隣の飛鳥に聞こえるから。

この時、あたしは文字通り生まれて初めて飛鳥と隣同士でいることが辛いと思った。

そして、そんなことを考えてしまう自分が、心底何より嫌いだと思った。

02：このスカポントン！（後書き）

お待たせしてしまいましたすみません。

02をやつとこさ更新です。基本的に琉衣は勝手に動くので産みの苦しみはないんですが、ただ頭の中で動く彼女を文字にする時間がない！！飛鳥はそもそも動かない！！

…まあそんなところで、今回はあれですね、連載のみそになるすれ違い、ですよ。そこは話の中で出てくるでしょうからおいといても、今回で琉衣の昭和言葉のルーツが明らかに…笑

きつと外国が舞台の、男装の麗人と幼なじみとの悲恋もののアレとかも読んでるんですよ奴は。でも日本が舞台じゃないからって自分の語彙の参考にはしてないですよ、きつと（笑）

まあそういう私も高校の時ただハマりしてがっがっ読んでましたけど。

あれは面白いよ仕方ないよー笑

そんなこんなで次回03ですね。間空きすぎないようにがんばります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9125s/>

マジで恋したその後は。

2011年9月30日03時23分発行